

今年も間もなく十五夜を迎える時節となりました。

闇の世界を照らす明るい月の光は、仏教において迷いの世界を照らし出す様の悟りや慈悲を象徴します。

道元禅師の『しょうぼうげんぞう正法眼蔵』では、この月を表すのに通常の月という漢字一字ではなく、まんようがな万葉仮名を用いて都に機械の機を添えた漢字二字を当てて「つき都機」としています。都は全ての、あらゆるという意味を持ち、機械の機は働きという意味を持ちます。この二字の「都機」であらゆるはたらきという意味を月の光に寄せて伝えていきます。これによって仏様の働きがあらゆる所に行き亘っていく様を表現しようとなされたのでしょう。確かに月は水の中を始め様々な所に欠けることなく自らを映し出します。それはかつてお釈迦様が相手に応じてふさわしいたえ喩えを用いつつ巧みに導かれたという対機説たいきせつぼう法に繋がります。

道元禅師は従来はこの月の見方を更に一步、先に進めようとされました。私達は月を見た時、それは外側に光を放つ存在として映ります。水の中に映った月であってもそうです。しかしこの様な月の見方は絶対的なものであろうか？と道元禅師は私達に問いかけます。

例えば雲が流れているのに月が動いているように見えたり、自分を載せた舟が動いているのに、陸地が移動しているように見えたりという錯覚はしばしば起こる事です。実は私達の見方は極めて曖昧で相対的なものに過ぎません。私達は何かを理想とし、何かを目標として先を見据えて歩んでいることが多いのではないのでしょうか。しかし先を見据えて生きる生き方には未来に本来の自分、理想の自分がいて、今を歩む自分は仮の存在でしかなくなってしまいます。道元禅師はそこに疑問を呈しているのです。理想の仏様の姿は先にはなく、今、私達が現に歩んでいる一步一步が本物、実物であり、理想の姿、仏様の姿その

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

ものでもあると道元禅師は月の姿に託して説いているのです。

今月、来月と二度お月見の行事があります。本物の月は必ずしも空の彼方に輝きを放っているものばかりとは限りません。自分の内にも、空の彼方に輝く月と寸分も違わぬ心の月、「心^{しんげつ}月」が輝いているのだということにも目を向けつつ、お月見をなさってみてはいかがでしょうか。

— 終 —